

大原越え探訪

～西南戦争台場跡地へ～

吉田 勝重

(会員 佐伯市女島)

私たち史談会会員十五名は、明治十年（一八七七）に勃発した「西南戦争」の激戦地である宇目地区を探訪することになった。

西南戦争関連については、これまで多くの会員の報告が数多く寄せられている。今回は県埋蔵文化センターの高橋信武氏を迎え、当時の台場（戦跡）を訪問するという試みであった。

ご存知のように西南戦争は、今から約百三十年前に起こった乱である。現在の蒲江、宇目地区には多くの戦いの場があり史跡も多い。私にとって西南戦争は「大分の歴史ものがたり」の執筆の為、臼杵出身の藤丸警部について調べた時以来の事である。

車に便乗して一路大原越えに向かう。宇目ドライブイ



尾根道を歩く佐伯史談会一行

ンを重岡駅方面に下り、すぐ左手の林道を上がっていく。この道は、現在工事中で部分的に大きく切り開かれている。宇目―蒲江線だそうである。

私たちは、この切り開かれた道を登り、途中から、林道横の尾根道に入った。左手には新しい道の切り立った崖や堀切が見られる。右手には、昔の大原越えの道が、倒木に道をふさがれたり、草木で通れなくなりながらも見え隠れに続いていた。

旧大原越えの道は山の高低を考えて作られているようで、高い所を通らず一定の歩調で歩き続けられるように平坦な傾きを保つて続いているそうである。

しばらく登ると一つの尾根に辿り着いた。天気もよく視界も良好である。松の植えられた尾根道を南下。

尾根道沿いには鹿よけの網や山の境界を示す石碑、文化十一年の銘がさまざまな地蔵尊が見受けられた。この地蔵尊は、尾根道のやや右よりの所に置かれており当時の人々の、山の自然に対する思いや願いの深さを感じる事が出来た。

尾根道を更に進むと、高橋さんから「ここが第一の台場跡です。」と話が合った。

台場とは、西南戦争の際、薩摩軍・官軍が共に敵に対処するために作った陣地である。

高橋さんたちは、平成十八年度から県南の西南戦争の台場探しに何度となく調査にきているそうである。

大原越えの尾根伝いで二十七基の台場（戦跡）を発見し、大分県内遺跡発掘調査概報9に報告している。

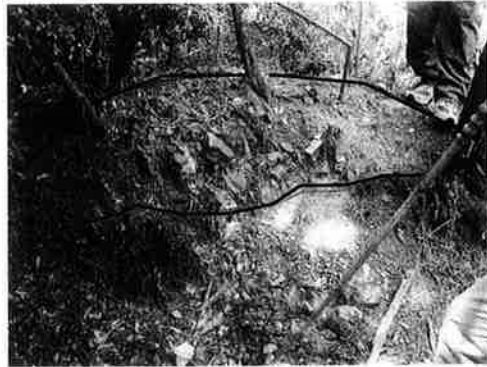
この最初の台場が、大原峠の一番目の台場であった。外から見ると松の木の向こう側に窪みがある程度に見える。横幅は三メートル程度、高さは一メートル二十センチ位に見えた。

百三十年の年月を経過し風雨による浸食が激しくかなり低くなっているとの事。実際は一メートル五十センチ程度はあったのではないかと言っていた。

この台場を見て西南戦争のものかどうか不思議に思った人もいたのではないだろうか？

単なる窪みでは深すぎるしと思っていると、講師の高橋さんが更に詳しく説明してくれた。

内側の窪みの中に腐葉土の層が見られるという。その上に岩や土などが積み上げられており、人工的なものである事が証明できるといふ。



第1の台場（下から）



第1の台場（上から）



第2の台場（手前が高橋さん）

実際に近づいてみると、その様子が明確にわかった。全体の長さは五メートル程度である。台場の位置や方向から「西郷軍の台場」だと説明してくれた。

さらに、二十メートルほど尾根道を進むと第二の台場があった。

この第二の台場は自然の窪地を利用し敵対したもので、穴の深さが五十センチほどであった。実際には胸の高さまであったのではないか、台場から鉄砲を出し右手の尾根

からの敵を迎え撃つたのではないかと話されていた。

この付近から先、尾根伝いに次々と台場が見受けられるようになった。

形もこれまでの窪地のようなものから、一人たこつばのようなもの。集団で敵対できる凹形のもの、星形のものなど変わった形のが見られるようになった。

尾根道が台場の中央を通り、左右に窪みがあるものもあった。

台場の中央に通路があり、左右に少し窪んだ場所が四カ所あるもの。

函館の五稜郭の形を連想させるものなど、この台場を含め二十七基にのぼる戦跡がこの大原峠に見られる。

私たち一行は、さらに尾根道を南に進んだ。

その途中に横長の丸い形、半円形の台場、花卉状の台場、星形の台場などがあつた。この大原越えの台場は「大原越え多稜堡壘群」と呼ばれている。

このような台場は、大原越えのみならず、重岡小学校西側、田代集落東側、駒鳴峠、大畑周辺、榎峠周辺大原西部、豆穀峠、椎葉山、赤松峠観音山、水ヶ谷周辺、津島畑山、松尾山などに多く見られる。

西南戦争の記録一、二、三号に、その数や研究の成果が載せられていた。



削られた尾根道を歩く



色々な台場の形状





〈台場の数〉

- ・宗太郎越え南部、観音山の台場 50基
- ・宗太郎越え北部、エゴノ山の台場 21基
- ・豆穀峠の台場 26基
- ・黒土峠の台場 101基
- ・板戸山周辺の台場 23基
- ・水ヶ谷周辺の台場 250基
- ・大原峠越えの台場 27基



- ・赤松峠周辺の台場 50基
- ・椎葉山の台場 5基
- ・津島畑山の台場 7基
- ・松尾山の台場 3基

載せられている台場の数だけでも、563基もある。

途中で埋没した台場もあると思うが、薩摩軍と官軍が造った台場がこれほど残っているのは大変すばらしい事である。このような台場の大部分は次第にもとの自然に

帰ることになるだろうが、高橋さんをはじめ多くの人々が百三十年前の西南戦争の激戦地の調査を通して当時の人々の生き様に触れ、文化財として後世に残していく事は大切な事である。

尾根の左右に広がる急斜面。斜面をよじ登って戦う官軍と薩摩軍。当時の山々は一面の草原であったという。遠くまで見通しがきき敵の様子が一望できたに違いない。このような急峻な山の尾根を登ったり下ったりしながら

戦闘を続けた官軍や薩摩軍の人々の生き様は、戦闘資料や地域の人々の話から推察するだけである。大変だったろうなあと思うと同時に一つのロマンを感じた。帰りに高橋さんが一つの葉莢やつきょうを発見した事も一つのロマンである。

